

里地里山30コンテスト 府から2団体

シイタケの栽培に汗を流す「里山ねっと・あやべ」のメンバー（綾部市鍛冶屋町で）



里地里山の保全に取り組み団体を表彰する日本
の里地里山30コンテストへ読売新聞社主催環境省
共催)に、府内から宮津市のNPO法人「里山ネット

宮津・ネットワーク世屋

棚田や民家再生

里山ネットワーク世屋は、丹後半島の奥に広がる豪雪地の世屋高原で、米作りなどに取り組む六団体が集まり、二〇〇三年八月に結成。過疎化で荒廃した山や棚田、古民家などを活用することで、「里山の景観」として再生しよう」と、地元農家や会社社長ら十九人が活動、飯尾代表は「弾みがつく」と受賞を喜ぶ。

メンバーは棚田での無農薬米栽培や、フシの皮をはいで作る藤布の技術伝承のほか、湿原での自然観察会などを行っている。今は伝統的なササヅキ屋根の民家復元を目指し、研究を続けている。

飯尾代表は「高齢化など課題は多いが、地域の魅力を高め、都市住民らとの交流を通じ、里山保全の大切さを伝えたい」と話した。



棚田に植えた苗の生育状況を見る会員（宮津市上世屋で）

ねっと・あやべ

自然体験を提供

里山ねっと・あやべは、都会の人々に自然を体験できる場を提供する活動が評価された。メンバーの意見を活動に取り入れ、実績を積んできた成果、励みになります」と新山代表らが喜びをかみしめる。

二〇〇〇年七月、綾部市が府の助成制度を利用して立ち上げた。会員は京都や大阪、神戸市などの都市に暮らす二十七八歳の約百人。荒れた山の間伐を手伝う森林ボランティアから始め、週末や休日を使い、そば打ち教室、伐採した竹を使った炭作り、シイタケ栽培など、会員のアイデアを次々に具体化してきた。

現在、年会費とイベントの収益などで活動費を賄い、NPO法人化を目指す。「農業体験の機会を増やすなど活動の幅を広げたい」。

ワーク世屋(飯尾毅代表、綾部市の市民団体里山
ねっとあやべ(新山陽子代表の二団体が選ばれ
た。その活動や喜びの声を紹介する。